

再発足した。

小太郎漢方製薬(株)の漢方製剤が製造・発売されたのは昭和三十二年である。同社は同年、研究所、工場を整備し、桑野重昭氏を所長に迎えた。同氏は後に漢方煎液を抽出の後に減圧濃縮・乾燥する真空(減圧)泡沫乾燥法に成功した。昭和三十二年当時の行政の承認書類は現存しないとされ、僅かに当時の適応症のみが残されている。また承認の基準も不明である。

一九六二年(昭和三十七年)に当時の行政の承認書類はあるが、上記との関連は不明である。

一九六二年(昭和三十七年)と一九六三年(昭和三十八年)に医薬品製造承認指針が刊行され、漢方製剤の整備の道は進んでいく。

(平成十五年九月例会)

コレラに対する禁忌食品の時代的変遷

佐分利 保 雄

コレラは文政五年(一八二二)に初めて日本に侵入した。人々はこれを三日コロリと呼んで恐れた。

当時の人々も、コレラは消化器伝染病と認識し、経口感染と考え、ある種の食物を特に恐れた。これらの食品を仮りに禁忌食品と呼び、時代的に変遷した経過をたどって見た。

一八二二年、最初の流行では、山田椿庭が、酒、うなぎ、そば、糍(ごう)、ねぎ、樫、柿、とくにイワシ、鯛魚を禁忌とした。

一八五八年、第二回目の流行の時ポンペは、イワシ、サバ、マグロ、タコなどの魚類とカボチャ、トウキビ、キウリ、シマウリなどの野菜を禁じた。

一八六二年、第三回目の流行の時もポンペは長崎に居たので上記の食品が禁じられたであろう。

明治前半・ベルツは瓜類とくに真瓜、西瓜を廃棄し、未熟な果物、野菜を禁じ、肉類をすゝめた。

明治十二年(一八七九)にはカニ、カンテン、トコロテン、ヒジキ、アラメなどの海藻とナンキン、ナンバキビを禁じた。(明治十七年、一八八四 コツホがコレラ菌を発見)

明治後半、大正時代になると、魚類を恐れた。大正十一年(一九二二)には十六府県で、三ヶ月間漁業が禁止された。

昭和三十七年(一九六二)台湾バナナを焼却した。

昭和三十九年(一九六四)習志野事件発生・渡航歴のない宿泊客がエルトルコレラにかかり二十九時間後に死亡した。輸入紋甲イカが疑われたが、コレラ菌は検出されなかつた。

昭和五十三年(一九七八)池之端結婚式場事件が発生、十四人の患者、保菌者が出た。しかし食品からはコレラ菌が検出されなかつた。

昭和五十五年(一九八〇)、輸入食品から初めてコレラ菌が

検出された。以後、昭和五十九年(一九八四)まで〇〇十一件のコレラ菌陽性の食品が流入した。食品はエビ類が主で、輸入先はタイ、インド、フィリッピン、台湾、インドネシアである。

コレラ菌が発見されておよそ百年経て、ようやく食品からコレラ菌が検出されるようになった。したがって、それ以前に禁忌食品とされたものは推量に過ぎず、恐らくコレラ予防には役立たなかつたと考えられる。

(平成十五年九月例会)

中神琴溪引書枚

その医学思想についての文献学的概観

館野正美

中神琴溪(寛保四(一七四四)年〜天保四(一八三三)年)、一代の天才的医家である。一時、吉益東洞の門をくぐってその教えを受け、彼自身も東洞を尊称しつつ、それでも尚八規則を離れ、融通無碍の治療法を展開し、大いに実績を挙げ、活躍した、文字通り、稀代の傑物である。

琴溪のこの自在闊達の天性は、遺体の解剖に立ち合い、傷寒・金匱に縛られない臨機応変の処方を実施したことでも十分に伺われる所ではあるが、更に、実際いささか皮肉なことながら、一時は「三千人」と言われた門弟に八口授命の教えを施しつつも、真の「中神流」の後継者は、遂に一人も現

われて来なかつたという事実を見ても、また明らかし所である。正に「一代限り」の天才であった。

さて、この中神琴溪が一体いかなる医学思想を有していたかということは、彼の上記の如き人物像からして、極めて興味を持たれる所である。そして又、その医学思想を解明することは、ひとり江戸時代の古医方の流れを明らかにするのみならず、日本人的医療観・医学思想のあり方を省みる上でも、裨益する所まことに大なりと思われるのである。

とはいえ、実際のところ、このような問題については、管見の及ぶ限り、未だ十分には論究されていないように見受けられる。この点において、琴溪は今だに「謎の人」の域を脱していないのである。

そこで本稿は、この中神琴溪の医学思想を解明するに当たり、まずその基礎的研究として、彼の『生生堂雜記』・『生生堂医譚』・『生生堂養生論』・『生生堂傷寒約言』等の著書において見られる引用書目の分析を通じて、彼の学問的傾向を窺い、以てその医学思想の解明に資せんとするものである。その著述における引用書目の傾向は、自ずとその学問的傾向を明瞭にし、かつその思想自体までも明らかにするものであると考えられるからである。

そこでまず、琴溪の上記論著四種における引用書目は、総計二十九種、その内のほとんどが『論語』・『孟子』・『史記』等の中国の古典である。今回は、それらの内でも群を抜いて引用回数が多い『論語』からの引用について報告したい。